

第83回日本皮膚科学会 東京・東部支部合同学術大会を終えて

(2019年11月16・17日, 京王プラザホテル)

石河 晃

東邦大学医学部皮膚科学講座教授

はじめに

このたび、第83回東京・東部支部学術大会を信州大学・奥山隆平教授と東邦大学・石河晃が会長となり、新宿の京王プラザホテルで開催いたしました(図1)。2016年に東京医科大学の坪井良治教授と山形大学の鈴木民夫教授が合同で開催されて以来、3年ぶりの合同開催でした。近年まで2月に開催されていた東京支部の学術大会が秋に開催されることとなり、支部学会が集中している中、東部支部会員のアクセスの利便性から東部支部を東京で開催したいという奥山先生のご希望があり、東京で短期間で2回、中規模の学会を行うよりも、合同にして大規模な学会を1回開催したほうが会員の利益に供すると

考えました。また、東邦大学は自己免疫・アレルギーが主な研究分野であり、信州大学は悪性腫瘍や乾癬が主な研究分野でしたので、お互いの強みを分かち合うことでWin-Winの関係で学会を構築できるのではないか、との考えも奥山教授と一致しましたため、合同開催に踏み切りました。事務局長の信州大学の木庭幸子先生と東邦大の石井健先生を加えた4名(図2)により、合同学会を企画しました。

テーマ: Derma First

学会のテーマは「Derma First」とさせていただきました。アメリカファーストにあやかりましたが、トランプ大統領の言動や行動を考えますとかなり刺



図1 会場入り口看板



図2 両会長と両事務局長
左から木庭幸子先生、奥山隆平先生、筆者、石川 健先生



図3 藤堂具紀教授の特別講演1

激的なテーマです。このテーマには皮膚科学を発展させ、皮膚科医が誇りをもって診療にあたることができる環境をつくることにプライオリティを置きたい、という気持ちを込めました。皮膚科医は比較的に優しく穏やかで、奥ゆかしい人間が多いと感じていますが、皮膚科を取り巻く厳しい環境に打ち勝つには皮膚科を第一に考える思考も必要であろうと思い、このテーマにいたしました。しかし、実はまた別の理由もありました。それは東邦大学医学部皮膚科学講座(大森)がかつて皮膚科学第一講座と呼ばれており、医局のメールアドレスが“dermal1st@中略.jp”だったのです。私が中空をみつめて学会テーマを思案しているときにスタッフの誰かがボソッと口走った言葉でしたが、その場で即決してしまいました。決してトランプが好きで思いついたわけではありません。

それはさておき、大学病院に勤務する医師、一般病院で勤務する医師、診療所で診療する医師、それぞれの立場で楽しめるように、信州大学と東邦大学でプログラムを設定いたしました。



図4 永尾圭介先生の特別講演2

学術プログラム

特別講演、文化講演、メインとするシンポジウムについては各大学で1つずつ提案しました。特別講演1では東京大学医科学研究所の藤堂具紀教授に、がんのウイルス療法のご講演をいただきました(図3)。藤堂先生はこの領域の第一人者です。遺伝子組み換え単純ヘルペスウイルス1型を用いた悪性黒色腫治療に関する医師主導治験が開始されるところまで来ており、今後の新たな治療戦略として大いに期待される研究です。特別講演2では米国NIH(National Institute of Health)の永尾圭介先生に、生物と微生物の共存関係が毛包を介した免疫細胞の制御と密接に関連があることについて最新の研究成果をお話いただくとともに、single-cell RNA sequencingを用いた薬剤過敏症症候群の病態解析への応用について、実患者の治療に役立った体験と合わせて講演いただきました(図4)。永尾圭介先生は慶應義塾大学皮膚科の後輩で、いわゆる帰国子女でした。入局当初は研究はせずに臨床を極めたいといていたものですが、ひとたび研究の世界に入ってから皮膚免疫の最先端をひた走り、斬新な発想で世界を切り開いています。

文化講演1では東京大学大学院総合文化研究科・



図5 西川武二名誉教授による特別企画講演

言語情報科学専攻の石原あえか教授に皮膚科のムラージュの歴史、現状について、独文学者ゲーテとの関わりなども含めて多数の写真を交えてご講演いただきました。先生の著書『日本のムラージュ』の写真を撮影した写真家・大西成明氏にも会場にお越しいただいておりました。慶大所蔵のムラージュを展示したことも相まって、ムラージュの存在を初めて知ったという声も多く聞かれました。文化講演2では山梨大学副学長の岩崎甫先生にアカデミアからの新規治療薬や技術の創出についてAMED(国立研究開発法人日本医療研究開発機構)事業のご経験から現状と課題をお話いただきました。

さて、2人の会長が共同で企画したものも用意しようということで、「特別企画 若い世代へのメッセージ～derma firstのために～」をもう1つの目玉とさせていただきました。私の恩師・慶大名誉教授の西川武二先生(図5)と奥山教授の恩師・東北大学名誉教授の田上八朗先生(図6)が、それぞれ臨床、研究のこれまでのご業績やご経験を語られ、常に自ら研鑽することの重要性がメッセージとして伝わってきました。

その若い世代をターゲットとしたハンズオンセミナーを、例年より多く10テーマ用意いたしました。こちらはたいへん人気が高く、事前申し込みが



図6 田上八朗名誉教授による特別企画講演

開始後、早いもので1時間以内、遅いものでもわずか数日で満席になりました。若者のネットでの情報収集力の高さに逆に感心させられました。

シンポジウムは信州大の木庭先生がオーガナイズした「メラノーマ診療を極める」と、東邦大の石井先生がオーガナイズした「水疱症診療を極める」を初日の第1会場に配置しました。そのほかにシンポジウム4題、教育講演15題、専門医共通講習必須3題、多数のスポンサードセミナー・シンポジウムを設定しました。

一般演題は口演とポスター両方でのプレゼンテーションをお願いしたにもかかわらず、応募〆切時点で235演題に及ぶ多数の応募がありました。座長の先生方、学術委員の先生方のご協力を得て、8題の合同学会賞を選考し、懇親会で表彰するとともに副賞を贈呈いたしました。会長賞は北海道大学の乃村俊史先生と信州大学の中村謙太先生が受賞いたしました。

懇親会

懇親会では、信州大の先生方にお骨折りいただき集めた日本酒とワインの名品を提供いたしました。自分自身は会長の役目もありたくさん飲むことが



図7 展示会場

できなかったのは残念でしたが、1本もち帰らせていただき、後日楽しむことができました。食事も信州牛を提供いただき、信州の食材を取り入れた料理をお出しすることができました。いろいろな意味で、合同大会にしたメリットが感じられたのではないかと自負しております。

おわりに

皮膚科を取り巻く社会環境は必ずしも容易なものではありません。厚労省の見通しでは、近い将来、皮膚科医は余ると推計されています。その計算の正

否は検証する術ありませんが、矛盾点を指摘することだけは可能ですので、自分にできることを粛々と行っていきたいと思っています。皮膚科診療、皮膚科研究、皮膚科教育の質の向上を図ることにより、皮膚科のニーズ、社会的地位を高めてゆくことが重要です。皮膚科医1人1人がそれぞれの立場で、derma firstの誇りをもって日々を過ごせたら、そして今回の学会がその一助になったのであればこのうえない幸せです。今回3,100名を超える先生方にご参加いただきましたが、そのすべての先生方、ご協力いただいた企業の方々、そして大会運営にご尽力いただいた日本皮膚科学会事務局の皆様には御礼申し上げます。